

村上信彦の『奇譚クラブ』における匿名テクストを解読する

——戦後の民主的平等論者の分身について

河原 梓 水

はじめに

戦後から一九七〇年代にかけて多数の著作を発表した村上信彦は、服装史、女性史、医療問題等、様々な分野で業績を残した。特に女性史では、一九六九年、全四巻の名著『明治女性史』の刊行を開始すると同時に、それまでの女性史の方法論に根本的批判を唱え、その後の女性史の動向に大きな影響を与えた^①。解放運動史のみではなく、庶民女性の実生活を含めた女性の全生活史を、という彼の提唱は、激しく批判されながらも結果的にその後の女性史研究の質的転換をうながした。

村上の業績は一九七〇年代ばかりではない。彼は一九四七年に既に『女について——反女性論的考察——』を発表して既存の女性論を批判するなど、高群逸枝と並んで戦後の女性史を切り開いた先駆者の一人であった。また、一九五五年に発表された『服装の歴史』全三巻は、男女の服装の違いからジェンダー規範を照射するという、現在では当たり前となった視点による先駆的研究といえる。

さて、近年村上の長女・康子氏から村上の書簡が日本近代文学館に寄贈され、二〇一四年、江種満子氏らによって高群逸枝との往復書簡が『日本近代文学館年誌』に解説付きで全文翻刻された^②。以前より西川祐子氏らによって高群逸枝の再評価は進んでおり、この書簡群によりさらなる研究の進展が期待される。一方、高群の盟友であり、共に女性史を切り

開いた村上の業績は次第に忘れられつつあったと言えるが、この書簡の翻刻によって村上信彦を再評価しようとする機運はまさに今高まっている。

村上は、服装史、女性史、医療問題、小説など様々なジャンルに多くの著作を残したが、これらはすべて「村上信彦」名義で書かれており別の筆名はほとんど知られていない^③。しかし筆者は戦後まもなく発刊されたアブノーマル風性俗雑誌の一つ、『奇譚クラブ』誌上に村上信彦の匿名記事を多数発見した。本稿ではこれらが村上の筆によるものであることの実証を行なった上で、これらのテクストから村上のサディズム論を論じ、さらに彼の女性論を読み直すことを試み、彼の再評価のための一助とするものである。

一 『奇譚クラブ』と吾妻新

『奇譚クラブ』は、一九四七年一月、大阪府堺区内菅原通四丁目三〇に所在した曙書房から吉田稔を発行人として創刊された月刊雑誌である。一貫してアブノーマルな性を題材とし、『家畜人ヤプー』などの作品で著名な沼正三、『花と蛇』で知られる団鬼六などのSM作家を多数輩出し、また野坂昭如などの著名な作家が別名で寄稿していたことで知られる。幾度かの休刊を挟みながらも、一九七五年まで発行され続けた。

同誌は、主に読者からの投稿作品を掲載するスタイルで運営され、沼正三・団鬼六らも、もともとは本誌の読者として投稿を始めた作家であった。村上の別名と考えられる吾妻新も同様である。吾妻新は、『奇譚クラブ』一九五三年三月号に「サディズムの精髓―古川裕子氏の『囚衣』をよんで―」を初掲載、以後およそ三年にわたり、サディストの立場からほぼ毎号一篇以上の作品を発表し続けた。現在では全く無名の存在であるが、彼は当時、沼正三と並ぶ『奇譚クラブ』の看板作家であり、彼の著作がその後のSM文化に与えた影響は大きい。彼が『奇譚クラブ』及び、『奇譚クラブ』が会員向けに発行した機関紙『KK通信』に発表した著作一覧を表Iに示す。以下、吾妻のテクストは表番号とタイトルで示し、出典は省略することとする。

彼の『奇譚クラブ』における著述活動は一九五三年から一九五五年の三年間をピークとする。著作がない期間の内、一九五五年六月～九月、一九五五年一月～一九五六年三月は『奇譚クラブ』そのものが休刊となっていた期間であり、したがって彼は一九五三年三月～一九五六年四月まで、ほぼ毎号原稿を掲載し続けたと言える。

彼のテクストは、小説である「感情教育」、「夜光島」と、「サディズムの精髓」、「私は訴える」などのサディズム擁護論、「クリスチーナの受難」、「アリスの人生学校」などの海外小説の翻訳、そして「海外サディズム雑記」、「明治時代の新聞覚え書き」など、海外や過去の事例を紹介し、サディズムを中心としたアブノーマルな性癖を歴史的にとらえようとするもの、そして同じ『奇譚クラブ』執筆者への応答の形をとって書かれたエッセイ・評論で構成される。

吾妻の著作には二つの特徴がある。第一に、常にサディズムの実践者としての立場から書かれている点である。彼は自身をモデルにした小説で、夫婦間の幸福なサディズム的实践を描いてみせたり、サディズムを

擁護する評論を複数発表したりした。その活躍は『奇譚クラブ』誌上でサディストの「総帥」とまで呼ばれるほどであった。

第二に、彼の著作には常にズボンと猿ぐつわが登場する点である。彼は誌上においてズボンと猿ぐつわの熱烈な愛好家として知られ、ズボンの評価をめぐって沼正三に論争をしかけたこともある^⑤。村上は『服装の歴史』をはじめとして多くの論考で、男女平等時代の女性はズボンを穿くべきだという主張を展開するが、この主張は彼の服装史研究からの論理的帰結のみならず、彼の個人的なズボン愛好の影響もあったであろうことが推測される。以下、まず吾妻と村上のテクストを比較して両者が同一人物であることを実証し、次に吾妻のテクストに基づき、公娼制度を中心とした村上の女性論の新たな解釈を試みることにする。

二 吾妻新と村上信彦のテクストの比較

(一) 固有名名の一致

本章において、吾妻と村上のテクストを検証してゆくが、現在判明している限りでの村上の一九六一年までの著作一覧を表IIに示した。表Iと併せて適宜参照されたい^⑥。

吾妻と村上のテクストの間には、多くの固有名名の一致が見られる。村上とその妻をモデルとした吾妻の小説「感情教育」は戦前から戦中を舞台としていたが、主人公章三郎は娘を秋田に縁故疎開させ、その後妻の由紀^⑦も遅れて秋田に疎開、終戦後は栃木県那須村へ移動する^⑧。村上もまた、家族を秋田へ疎開させ、終戦後は栃木県那須村へ移っている^⑨。さらに、戦中、村上は単身で東京に残り、昭和一九年(二九四四)に京橋越前堀郵便局長となった。章三郎もまた作中で、「昭和十九年十二月、(中略)

表 I 吾妻新『奇譚クラブ』・『KK通信』著作一覧

	タイトル	発行年月		頁数
1	サディズムの精髓—古川裕子氏の「囚衣」をよんで—	1953	3	20-25
2	風流猿轡	1953	4	160-162
3	風流責各態	1953	5	29-33
4	サディズムの演劇※1	1953	5	7
5	(翻訳) キドロトシユトツク「クリスチーナの受難」※2	1953	6	16-27
6	新しいサディズム	1953	7	108-109
7	(翻訳) キドロトシユトツク「クリスチーナの受難」	1953	7	16-28
8	(沼正三氏に) 女のズボンについて	1953	8	132-137
9	(翻訳) キドロトシユトツク「クリスチーナの受難」	1953	8	96-109
10	鞭うたれる外国の少女達	1953	9	20-26
11	女のズボン (最後の回答) —沼正三氏に—	1953	11	150-151
12	感情教育	1953	11	174-184
13	感情教育 (二)	1953	12	110-119
14	(翻訳) サディ・ブラッケイズ『アリスの人生学校』※3	1953	12増	1-176
15	感情教育 (三)	1954	1	164-173
16	感情教育 (四)	1954	2	108-118
17	感情教育 (五)	1954	3	120-130
18	感情教育 (六)	1954	4	154-164
19	海外サディズム雑記 さるぐつわ (上)	1954	4	67-73
20	感情教育 (七)	1954	5	52-65
21	海外サディズム雑記 さるぐつわ (下)	1954	5	98-103
22	感情教育 (八)	1954	6	146-157
23	海外サディズム雑記 (3) 服装の利用 (上)	1954	6	94-101
24	感情教育 (九)	1954	7	208-221
25	海外サディズム雑記 (4) 服装の利用	1954	7	164-170
26	コンビネーション随想に答えて	1954	8	174-175
27	感情教育 (十)	1954	8	180-193
28	海外サディズム雑記 服装の利用	1954	8	48-60
29	絵物語 牧場物語	1954	9	12-23
30	感情教育 (十一)	1954	9	208-220
31	私は訴える—サディズム審判の—被告として—	1954	9	36-51
32	夜光島	1954	10	278-290
33	夜光島 (二)	1954	11	208-221
34	裏返しのA 感覚—羽村京子さんに—	1954	11	260-265
35	夜光島 (三)	1954	12	84-97
36	夜光島 (四)	1955	1	302-315
37	夜光島 (五)	1955	2	286-299
38	夜光島 (六)	1955	3	58-70
39	夜光島 (七)	1955	4	276-290
40	明治年間の新聞覚え書	1955	4	46-54
41	孤独の広場—古川裕子さんへ—	1955	5	287-289
42	明治年間の新聞の覚え書 (二)	1955	5	86-92
43	きいたふう	1955	5	120-141
44	明治年間の新聞覚え書 (三)	1955	10	136-142
45	明治年間の新聞覚え書 (四)	1955	11	112-117
46	明治年間の新聞覚え書	1956	4	18-23
47	古川裕子への手紙	1961	5	76-82

※1 『KK通信』掲載。

※2 「クリスチーナの受難」は1935年刊行"Christine"の抄訳。全訳として吾妻新訳『被虐の家』が亜風社より1953年に刊行されている (B6版・全223頁・函入・定価320円)。『奇譚クラブ』に広告が掲載されており、購入申込は曙書房代理部へととなっている。亜風社の住所は大阪ではなく東京都文京区駒込蓬萊町18となっており、発行者は森耿。

※3 本号は本作品のみを掲載した特別増刊号。サディ・ブラッケイズはピエール・マッコルランの別名であり、2002年、マッコルラン作品として吾妻新訳がほぼそのまま学習研究社より書籍として刊行。挿画は省略される。

表Ⅱ 村上信彦著作一覧（～1961年）

	タイトル	発行年月日		出版社/掲載雑誌	分類	備考
1	アレクサンダー・ベルクマン『クロンシュタットの略奪』	1928	11	自由書房	翻訳	名義は小池英三（「小池英三との思い出」La1）
2	永遠の女性について	1930		学友会雑誌 22	エッセイ	早稲田第一高等学院発行
3	秋	1934頃		青春派社（自費出版）	翻訳	友人の詩をエスペラント語に翻訳（「私とエスペラントの出会い」La 1968.7）
4	音高く流れぬ 第1部	1940		興風館	小説	1958年に改稿の上再出版
5	シエロツエウスキ『悲惨の涯』	1940		興風館	翻訳	名義：和見正夫 エスペラント語からの翻訳
6	音高く流れぬ 第2部	1941		興風館	小説	
7	我が国商業の発展策	1941	6	商業組合 7 (6)	論文	懸賞論文
8	出版屋庄平	1942		教文館	小説	1950年再出版。
9	音高く流れぬ 第3部	1942		興風館	小説	
10	ベリル・ベッカー『芸術と生涯』	1943		淡海堂出版	翻訳	ポール・ゴーガン伝記。
11	女について・反女性論的考察	1947	5	興風館	論文	
12	霧 第1巻	1947	5	興風館	小説	後に改稿して『霧のなかの歌』へ
13	標的者：憑かれた精神の考察	1948	9	西荻書店	論文	
14	日本人の服装	1948	7	産業と産業人 1 (4)	論文	
15	農村の青春はどうなるか	1948	11	青年新聞	評論	東京、青年新聞社。連載（11月30日～12月14日）
16	ある青春	1949	1	青年新聞	評論	連載（1月4日～1月10日？）
17	処女性の問題	1949	1	青年新聞	評論	連載（1月11日～1月25日）
18	風ある季節	1949	3	読売新聞	小説	第一回読売新聞小説賞・佳作に入選・賞金1万円
19	衣服に現われた女の地位	1949	3	青年新聞	評論	連載（3月8日～4月5日）
20	婦人運動の本質—共産党の政策と運動方針について—			青年新聞	評論	
21	アメリカ女性史			青年新聞	評論	連載？（書簡）
22	出版屋庄平の悲劇 上巻	1950		西荻書店	小説	8の再販
23	出版屋庄平の悲劇 下巻	1950		西荻書店	小説	この頃、パトス社より雑誌『熊蜂』を創刊。5号で終刊（1950年5月～1951年4月）
24	若い声	1952	2	青年新聞		2月12日1面
25	社会生活	1952	4	労働省	論文	婦人週間・記念懸賞論文・入賞・賞金5千円 名義は青年新聞社内・西峯三景（「高群2」）
26	農村の家庭	1952	4	労働省	論文	婦人週間・記念懸賞論文・選外佳作賞金15百円（「高群2」）
27	青衣の画像	1952	7	探偵実話 3 (8)	小説	最初の『探偵実話』への掲載（「高群1」）
28	女の男装、男の女装 花森安治の思想と生活	1952	7	サンデー毎日 34号	評論	
29	逆縁婚	1952	9	探偵実話 3 (10)	小説	
30	哀妻記	1952	11	探偵実話 3 (13)	小説	
31	執筆者の横顔	1952	11	探偵実話 3 (13)		
32	青線区域	1952	12	日刊スポーツ	小説	新聞連載小説（1952年12月15日～1953年8月1日、全228回）

33	完全犯罪	1953	3	探偵実話 4 (4)	小説	
34	袖に隠れた白い腕	1953	3	りべらる 8 (4)	小説	
35	永遠の植物	1953	6	宝石—探偵小説雑誌—	小説	
36	テート・ベージュ	1953	6	探偵実話 4 (7)	小説	
37	探偵作家コント集：賭将棋	1953	7	将棋世界		日本将棋連盟。
38	わかい谷間	1953	9	日刊スポーツ	小説	新聞連載小説 (1953年9月23日～1954年3月31日、全184回)
39	試験結婚	1954	2	探偵実話 5 (2)	小説	
40	薔薇と注射針 (後編) ヴィナス誕生	1954	3	探偵実話 5 (3)	小説	
41	青衣の画像	1954	4	探偵実話 5 (4)	小説	27の再録
42	ゆがめられた性：女らしさはだれがつくったか	1954	6	講談社	論文	11をわかりやすく改稿したもの
43	すでに気持は変っている「ズボンが投げた波紋」	1954	9	サンデー毎日 33 (40)	評論	9月5日 pp.64-65
44	乳房	1955	1	探偵実話 6 (2)	小説	
45	テート・ベージュ	1955	2	探偵実話 6 (3)	小説	36の再録か
46	女性論という名の処世論	1955	5	新日本文学 10 (5)	評論	第三書館。
47	逃げる女	1955	7	探偵実話 6 (8)	小説	
48	あたらしい幸福：その生き方・考えかた	1955	8	青春出版社	論文	
49	服装の歴史 第1巻：キモノが生れるまで	1955	10	理論社	論文	
50	対談 女は着せられている	1956	2	装苑 11 (2)	対談	文化出版局。河野鷹思との対談
51	服装の歴史 第2巻：キモノの時代	1956		理論社	論文	
52	恋愛の生態	1956		河出書房	対談	阿倍知二、石垣綾子、羽仁説子編『新しい女性 第2巻』収録
53	結婚は目的であるか	1956		河出書房	対談	阿倍知二、石垣綾子、羽仁説子編『新しい女性 第3巻』収録
54	服装の歴史 第3巻：ズボンとスカート	1956	4	理論社	論文	
55	女の風俗史	1957		ダヴィッド社	論文	
56	美と魅力	1957		三一書房		『講座女性 第一』収録
57	読書	1957	2	週刊東京 3 (6) (73)	対談?	
58	流行	1957	4	講談社	論文	ミリオン・ブックス
59	女性：どう生きてきたか	1957		青春出版社	論文	青春新書
60	男は一歩女は十歩の努力：愛情をめぐる適齢期男女のはなし合い	1957	8	学習の友 (46)	対談?	笠井潔との対談?
61	友情と恋愛の違い<友情の歴史>	1957	8	学習の友 (46)		
62	落ちたファッションの偶像	1957	11	週刊サンケイ 6 (45)		
63	佛界魔界：青年よ、大志を	1957	12	大世界 12 (12)		
64	流行は消え風俗は残る：今年の流行?	1958	1	学習の友 (51)		
65	世界に進出した「日本調」の海外進出について	1958	2	被服文化 (49)		
66	服装史研究の基本点	1958	6	被服文化 (51)		
67	暮しの随筆	1958	6	夫人生活 12 (6)		

68	日本人の服装：ひとつの生活史入門	1958		理論社		母の本棚シリーズ
69	音高く流れぬ わかきき獣たち	1958	1	三一書房	小説	69～72は、4.6.9の改稿
70	音高く流れぬ 聖家族	1958	4	三一書房	小説	
71	音高く流れぬ 氷の宿	1958	7	三一書房	小説	
72	音高く流れぬ くだかれた春	1958		三一書房	小説	
73	寛容について	1958		徳目についての41章		明治図書出版
74	解説	1958		清水澄子『ささやき：自殺した少女の手記』	解説	
75	座談会 服装史研究の基本問題をめぐって	1958	12	被服文化 (54)		今和次郎、志賀信夫との座談会
76	紺の制服：バスの女子車掌たち	1959		三一書房		浪速書房。探偵実話に執筆した小説の再録か
77	針	1959		江戸川乱歩共著『四つの幻影』	小説	
78	女のズボンにまつわる錯覚と偏見	1959	2	被服文化 (55)		扉のことば
79	女の職業と呼び名の変化(上)	1959	3	学習の友 (65)		
80	女の職業と呼び名の変化(下)	1959	4	学習の友 (66)		
81	街頭時評 国産モードはどこから生れるか	1959	6	装苑 14 (9)		
82	組織のなかの不感性	1959	9	学習の友 (71)		
83	虚像と実像・村上浪六	1959	10	思想の科学：第4次(10)	エッセイ	
84	涼しく着るための条件	1960	7	婦人倶楽部 41 (9)	エッセイ	
85	わが早婚に悔なし	1960	10	装苑 15 (12)	エッセイ	
86	霧のなかの歌第一部：消される人たち	1961	7	三一書房	小説	
87	組合婦人活動家	1961	3	月刊総評特集号		
88	霧のなかの歌第二部：よごれた雪	1961	8	三一書房	小説	
89	霧のなかの歌第三部：軍歌	1961	9	三一書房	小説	
90	書評	1961	9	書齋の窓 (94)	書評	有斐閣
91	霧のなかの歌第四部：泥と花	1961	10	三一書房	小説	

☐ = 吾妻新の主な活動期間

* 典拠資料は以下のように略称した。

- ・日本近代文学館所蔵・村上信彦書簡集→(書簡)。
- ・『高群逸枝雑誌』連載・「私のなかの高群逸枝」1～8→「高群1」など。
- ・『La Movado』第1号→「Lal」。巻号のない号は年月を示した。

* 本表は国立国会図書館をはじめとした各図書館のデータベースを参照するなどして、筆者が未入手の著作も掲載しているため、発行年月には誤りがある可能性があり、暫定的なものであることをあらかじめお詫びする。村上の著作には(特に1958年以降)まだかなりの脱漏があるはずであり、今後早急に確認作業を進めたい。

京橋のE郵便局長になった」^⑩。ここで吾妻は、当時の郵便局が、局に必ず防空責任者を住まわせなければならなかったこと、彼の郵便局の事務員は、局長代理の青年一人を除いて他は全員若い娘であり、結局章三郎が局舎の二階に住まなければいけなかった、というエピソードを盛り込んでいる^⑪。このエピソードは一九六一年に村上が発表した小説『霧のなかの歌』(表Ⅱ-86、88、89、91)にも登場し、京橋郵便局長の娘であるヒロイン・志保が局の二階に住みこむこととなる。『霧のなかの歌』は一九四七年刊行の『霧』(表Ⅱ-12)を改稿・増補したものであるが、『霧』にはこのエピソードはない。

次に、吾妻の小説「夜光島」のヒロイン名は「登枝」、小説「感情教育」に現れる、主人公の娘の名は「真理(里)」であるが、これらは幼くして亡くなった村上の次女・三女の名と一致している。^⑫

(二) 特異なエピソードの一致

村上は一九五五年に発表した『服装の歴史—キモノが生れるまで』(表Ⅱ-49)において、以下のように記している。

昭和八年に結婚したとき、妻にズボンをはかせて写真をと、友人知己に結婚写真のかわりに送ったりしたのは、せめてものささやかなレジスタンスだった。^⑬

これは昭和初期としてはかなり特異なエピソードといえるが、全く同じエピソードが「感情教育」にもあらわれる。^⑭

写真屋をよんで、ズボンをはいた妻を抱きしめている写真をとらせた。若い写真屋だったので、すっかり気をのまれて指が震え、幾度

も撮り直したのは滑稽だった。章三郎はそれを沢山焼増して、結婚通知とともに友人や親戚にくばった。^⑮

「感情教育」当該記載は一九五三年一月号であり、村上の『服装の歴史』に先行する。村上が吾妻の記載を借用した可能性もなくはないが、結婚という周囲を巻き込むエピソードである以上、実名で『服装の歴史』を書いた村上が全く架空のエピソードを他人から借用するとは考え難い。ただし、村上の全著作を網羅できていないため、一致エピソードの初出がどちらかという点は確定できていない。

次に、「感情教育」(表Ⅰ-12)に記された、主人公章三郎＝村上の成育歴をみてみたい。

この男は少しませていたから、中学三年のときに大杉栄の追悼会に出席して、あやうく検挙されそうになり、(中略)学校で秘密の回覧雑誌を出しはじめ、それがわかつて教師と大立廻りを演じたりした。五年生のときには友人をかたらつて、ロンドンのフリーダム社からクロポトキンの「パンの掠取」を取りよせ、訳して雑誌にのせられた。がたたつて、学校と警察の問題になった。(中略)W大学にはいつて経済学を専攻するようになってから、彼の思想はアナキズムからマルキシズムに移つていつたが、ストライキで退学し(後略)――

(一七六―一七七頁)

大杉栄の追悼集會に参加したこと、旧制中学時代回覧雑誌『処女林』を出したこと、教師と大立廻りを演じたこと、クロポトキン『パンの略取』をロンドンのフリーダム社から取り寄せた事、ストライキで早稲田第一高等学院を退学したことはすべて村上の経歴と一致する。^⑯

次に、フランス人画家、ポール・ゴーガン（ゴギャン）に関する両者の記載をみてみたい。村上は一九四三年に、ポール・ゴーガンの伝記を翻訳・出版しており、その動機を小説に記している。

本郷三丁目の古本屋で、Beril Becker の“Paul Gauguin”を買った。夜、床のなかで二章ほどよんだとき、彼の胸は震へ、眼は涙でいっぱいになった。（中略）健太郎は偶然にも自分がゴーガンと同じく三十五歳であることに気付いて、わがことのやうにその衝動を感じた。（『霧』（表Ⅱ-12）二六二頁）

村上は後年、友人であった高群逸枝の回想録「私のなかの高群逸枝」においてもこのエピソードに言及しており、これが自身の体験に基づくものであることが確認できる^⑧。このエピソードとほぼ同じエピソードが、吾妻のテキストにも見られる。

本郷三丁目の古本屋で買った一冊の伝記本が彼の運命を変えることになった。かれは涙をながしてよみふけた。株式精算人である水夫上りの男が、絵を専心かきたいために年三万フランの収入をなげうつのである。（中略）その男が画家になるために事業を棄てたのは三十五歳のときだった。章三郎も正に三十五歳だった

（『感情教育（二〇）』（表Ⅰ-27）一九二〜一九三頁）

吾妻はここでは画家の名前を直接的に記していないが、その後によく段落において、「あゝ、君はメットよりずっと優れた女だ。そして、僕はゴーガンより幸福なんだ！」という記述があることから、これがポール・ゴーガンであることは明らかである。本郷三丁目の古本屋、三十五歳と

村上信彦の『奇譚クラブ』における匿名テキストを解読する

いう細部の一致に加え、これをきっかけに著述生活に入ったことも一致する。『霧』は「感情教育」に先行するので、吾妻が『霧』を参照した可能性は残る。

続いて、村上の小説『音高く流れぬ』の書評に関する記載についてみたい。村上は一九七八年、かねてから交流のあった石川三四郎の追悼記事において以下のように述べている。

石川三四郎は、他の作品のすべてを棄てて私の作品だけをとりあげ、三段ぬきの書評をおこなった。しかもその内容は「ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を思わせる傑作」といったような、顔から火が出そうなオーバーな讃辞であった^⑨。

これに先行する吾妻のテキスト「感情教育（八）」（表Ⅰ-22）にも、章三郎が書いたとされる小説の書評についての記述がある。

新聞に批評を書いてくれたものが二人出た。一人は幸徳秋水や片山潜と同期の著名な社会運動家で、それも三段ぬきに、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」と比較論評してくれた。（二四六頁）

石川三四郎は著名なアナキストであり、まさに「幸徳秋水や片山潜と同期の著名な社会運動家」である。吾妻のテキストではこの作品が『音高く流れぬ』であることは勿論記されていないが、「ジャン・クリストフ」という固有名の一一致、「三段ぬき」へのこだわりなど、細部の一致が見られる。

最後に、吾妻のエッセイ「きいたふう」（表Ⅰ-43）にみられる吾妻個人の情報に触れたい。ちなみに「きいたふう」というタイトルは村上が自身

の日記を基にして書いたドキュメント小説『黒助の日記』において、彼の旧制中学時代の同級生が書いたエッセイのタイトルとしても現れる。本作の登場人物は村上を除きすべて実名であり、実際に同名のエッセイが存在した可能性は高い。

吾妻は本作において、大胆に自身の本業について語っており、主だったものをまとめると以下の四点となる。

- ① 少なくとも二つの新聞小説を連載していた。そのうちの一つは「意外」に好評で、その新聞社始まって以来の成績だったとかで、半年の契約がずっと延長した。そのため季節は夏にかかった^①。
 - ② 二つの新聞小説のヒロインには一貫してズボンを穿かせ、緊縛と猿ぐつわのシーンを入れた。
 - ③ 新聞小説に映画化の話があつたが頓挫した。
 - ④ 最近では自分で映画のシナリオを書き、映画製作にタッチする予定がある^②。
- ①に関して、村上は確かにこの時期までに少なくとも二つの新聞小説を書いていたようである。一つは「日刊スポーツ」に昭和二九年（一九五四）一二月一五日から連載を開始した「青線区域」（表Ⅱ-32）である。村上はこのことについて以下のように述べている。

新聞小説は好評で、百五十回の約束が二百回以上にのび、（中略）社でも紙数の売上げが増したというので、次の連載を予約してくれた^③。

「半年の契約」と百五十回という回数も符合し、それが延長されたという点も一致している。村上のいま一つの小説は「日刊スポーツ」に続いて連載を開始した「わかい谷間」（表Ⅱ-38）である。これらは未調査で

あるが、②の点、作中にズボン姿のヒロインや緊縛・猿ぐつわが登場するかどうかの確認も含め、検討課題として残しておく。

③、④に関して。村上の新聞小説も一度映画化の話が持ち上がったことが確認でき、さらにこの時期彼がまさに徳富蘆花を主人公とした映画のシナリオを書きあげていたことが確認できる。以下は昭和三十年（一九五五）四月の村上の日記から回想した「私のなかの高群逸枝3」における記載である。

一年ほどまえから蘆花の青春期を描いた映画のシナリオにとりかかっていった。（中略）それ以前に、前号で触れた読売新聞懸賞小説の映画化が彼の手ですすめられ、松竹本社の重役会議はパスしたのに、京都の会議で保留になったいきさつがあつたので（後略）^④

「読売新聞懸賞小説」とは、一九四九年に佳作入選した「風ある季節」（表Ⅱ-18）であり、村上は佳作の賞金に満足して「引きさがつた」ため、実際は連載されていない。村上の記述には齟齬がある。「前号で触れた読売新聞懸賞小説」はおそらく「日刊スポーツ」に連載した「青線区域」あるいは「わかい谷間」のいずれかの誤りだろう。映画化が持ち上がったのも二作のどちらかであると考えられる。

日本近代文学館所蔵の小山いと子との書簡にもシナリオのことが見える。一九五五年三月一三日付の小山からの書簡に、蘆花のシナリオが完成したことを喜ぶ記述があり、村上は二月～三月初旬には映画化にむけた蘆花のシナリオを書きあげていたようである。

蘆花の映画シナリオの件もまた、吾妻テキストと符合する。しかし村上によれば、この映画化は同年四月二〇日ごろ「おじゃん」になる^⑤。なかば誇らしげに「きいたふう」にシナリオの執筆について記した直後に

計画が頓挫していたことになり、彼がどんな思いで発行された『奇譚クラブ』（同年五月一日発行）を読んだのかを考えると複雑である。

(三) その他の一致

一九六五年に発表された村上の小説『娘は荒野で』は、村上家族の、那須の開拓村での体験をもとにした小説である。その広告文には「殺して、ねえ殺して。こんな奴隷生活するくらいなら死んだほうがいい！」「娘は荒野でそう叫んだ。」と記されている。「感情教育（七）」（表I-20）にも、「殺して、ねえ殺して。こんな奴隷生活するくらいなら死んだほうがいい。ねえ、殺してよう！（六一頁）」というほとんど同じ台詞がある。この台詞は、章三郎の妻、由紀が那須村での開拓生活を回想し、章三郎に不満をぶつけた際の台詞としてあらわれ、発言の背景も村上のものと同じしているといえる。

その他、村上の小説『霧のなかの歌』に初出するエピソードと、「感情教育」に見えるエピソードの一致が複数みられる。郵便局に住みこむエピソードが一致している点は先に触れたが、その他にも複数みられ、主だった二つを以下に掲げる。

『霧のなかの歌』において、村上をモデルとした登場人物、友岡が、編集長を務める出版社にてフレイザー『金枝篇』全訳の出版を企画するものの頓挫したというエピソードがあるが、全く同じエピソードが「感情教育」にも現れ、翻訳者に支払った生活費の額まで一致している。²⁷⁾

村上は一九四〇年から三年間、当時東京都千代田区神田、日本教育会館に所在した興風館出版部に総務として勤務していたことが分かっている。このエピソードは興風館時代の体験を基にしていると考えられる。²⁸⁾

次に、戦時下の防空壕に関するエピソードが挙げられる。『霧のなかの歌』では、当時、各家庭の防空壕に蓋をつけなければならなくなったが、

資材が不足していたため、強制疎開で引き倒された建物から資材を調達したという。同様のエピソードが詳細な描写を交えて「感情教育（九）」にみえる。²⁹⁾

以上、吾妻と村上のテキストの一致について、主だったものを挙げた。吾妻のテキストに見えるエピソードは、村上の既発表作品だけではなく、当時未発表であったと推測される村上自身のエピソードとも一致しており、一致は相互的であることが分かる。また、いちいち取り上げることができないが、例えば『霧のなかの歌』の重要人物の苗字と「夜光島」のヒロインの苗字が一致するなど、微細な一致はこの他に大量に見ることが出来る。未だすべての村上の著作を調査できていないが、調査が進めば、さらに一致の件数は増加することが予想される。

これほど多数の一致をみれば、吾妻は村上本人か、少なくとも村上に公私ともに非常に近い人物だと断定できる。仮に吾妻を村上の関係者だとするならば、彼は村上の著作を知り抜き、それらの中から縦横無尽にエピソードを引用し、わざわざ固有名まで克明に一致させていることになり、その意図をあえて類推するならば、その人物は吾妻を村上だと誤解させようとしているとしか考えられない。しかし、当時の村上は、『音高く流れぬ』『女について』などを上梓していたものの、『服装の歴史』は未発売、いまだ文壇で重要な位置を占めるとは言い難い時期であった。³⁰⁾ そんな彼に注目し、すべての著作を読み、それを加工して『奇譚クラブ』誌上に発表する人物がいたとは想定しがたい。

前述の通り、村上の著作は網羅できていないため、先後関係については今後覆される可能性があるが、様々なエピソードが膨大な量で一致していることを踏まえれば、吾妻の正体は村上信彦本人であると見なし得てよいであろう。

(四) 村上信彦にとっての吾妻新と『奇譚クラブ』

村上が吾妻新として『奇譚クラブ』に寄稿していた一九五三年から一九五六年は、彼にとつてどのような時期にあたるのだろうか。

村上は戦後身を寄せていた栃木県那須地方の開拓村から上京した一九四九年、出版事業の失敗により莫大な負債を背負う身となり、以後しばらく経済的に非常に困窮した生活を送っていた。²²一九五二年頃になつても未だ負債の返済に追われつつ、『探偵実話』に「書きたくもない」推理小説を寄せたり、懸賞論文を書いたりして糊口を凌いでいたらしい。「私のなかの高群逸枝」所引の、一九五二年一月四日付村上の日記には、当時の心境が率直に述べられている。

貧乏が、あまりにも激しい貧乏が俺の生を食いつぶしてしまった。いま一度、この生をやり直すことができれば、…眼を閉じると偉大な夢を豊かに約束されていた青春時代が走馬灯のように浮かぶ。長生きしたい。絶対に長生きしたい。

その後も厳しい生活が続くが、「日刊スポーツ」紙に「青線区域」を連載することとなり、「貧乏に階段があるとすればその階段をいくつか上ったのであった」。さらに一九五三年、講談社から『女について』を平易な文章に改めた『ゆがめられた性』を出版することが決まり(表II-42刊行)、村上上の生活にも「長い暗いトンネルの出口が見えてきた」という。²³しかし依然として莫大な負債が存在し、「日々金が要るといふ現実を避けるわけにはいかず、金は切実に欲しかった」。吾妻が『奇譚クラブ』に登場する一九五三年三月という時期は、まさにこの時期に相当する。

同時期に『奇譚クラブ』に寄稿していた飯田豊一は、当時の同誌の原

稿料について、「たしか一枚三〇〇円」であり、「予想外に多い金額」だったと述べている。²⁴村上は一九五三年からおよそ三年に渡り、毎号一〇〇二五頁程度の原稿を書き続けており、『奇譚クラブ』は彼に毎月三〇〇〇円〜七五〇〇円以上の収入をもたらしていたはずである。『奇譚クラブ』は苦しい時代の村上を経済的に支えたわけである。

しかし村上には、ただ露命をつなぐために『奇譚クラブ』に寄稿したのではない。村上には吾妻名義での執筆活動について「これが普通の雑誌だったら決してそんな熱意は起らないのだが、本誌にかぎってそうでないところをみると、やはり私がアブノーマルだからなんだと思う。だから私は本誌に限って、求めに応じてかくのではなく、かかせてもらっているのである」と述べている。²⁵『奇譚クラブ』は彼にとつて特別な存在であり、とある事件によつて沈黙するまで、彼は熱意をもつて同誌に寄稿を続けていたとみてよい。²⁶

吾妻の著作群は、サディストの立場からサディズムを論じたり、自身のアブノーマルな性癖を赤裸々につづつたりしたもののが大半を占める。彼が活躍した一九五〇年代当時、サディストは未だ犯罪者や異常者と同視されていたため、村上がこれらのテクストを匿名で書いたことは当然のことであつた。しかし、ここまでの考察から判明するように、村上は無防備ともいえるほど多くの個人情報や作品内に取り込んでおり、彼を知る者が読めば、吾妻新が村上信彦であることは一目瞭然であつたことだろう。現に彼は「感情教育(十二)」(表I-30)において、「あの小説の第一回がのつたとき、これは君のことだろうと当てた友人がすでにいるんだ」と章三郎に語らせているし、「類似誌の編集長が私の友人を紹介して会いたいと申しこんできた」とも書いている。²⁷少なくとも親しい友人の間では、村上が吾妻であることは早い段階で知られていたのだろう。

村上の無防備さの理由の一つとして、彼が常に自身の体験を詳細に描

写しつつ創作を行なうタイプの作家だったことがあげられよう。「孤独の広場」(表I-41)において彼は、「僕には現実から全く遊離したものをかけない性質がある」と述べている。実際に、彼は小説家としても複数の作品を残したが、それらの多くが自身をモデルとしたものである。特に彼の日記を基に構想された「ドキュメント小説」『黒助の日記』の場合、登場人物は主人公の黒助＝村上以外すべて実名で登場する。「書きたくもない」推理小説にすら、疎開先であった那須の開拓村を登場させたり、彼が郵便局長を務めていた際に見聞きしたであろう切手取引について描いたりしたものなどがある。一見不要と思える個人情報書き込みは、自らを創作の糧にするスタイルが「感情教育」や「夜光島」においても貫かれた結果といえよう。「夜光島」は同じく『奇譚クラブ』の常連投稿者であった古川裕子をモデルとした空想上の物語であるが、その舞台となった佐渡は村上の妻昌子の出身地であり、かつて、村上は実際に佐渡への移住を夢見ていたらしいことが、小山いと子との書簡にみえる。

しかしながら、村上が匿名性にそれほど拘らなかつた最も大きな理由は、おそらく彼のサディズム論の特質にある。強調しておきたいのは、彼はジキルとハイド——村上の好んだ表現であるが——のように、女性解放論者としての表の顔と、サディストとしての裏の顔を使い分けていたわけでは決してないということである。筆者の見るところ、村上は自身のサディズムと女性解放論が矛盾するものとは考えておらず、事実彼のサディズム論は彼の女性論・服装論と矛盾なく密接に結びついていた。

本稿を成すにあたり、匿名で書かれた内容を世に「暴露」することについては躊躇があったものの、村上の吾妻新としてのテキストを熟読するにつれ考えが変わった。すなわち、彼のサディズム論は彼の女性史研究の重要な一部であり、両者を一体として論ずることが必要であるし、また彼もそれを望んでいたのではないかと考えるようになった。村上は

「きいたふう」において、自分がサディストであることを告白しないのは、「じぶんに恥ずるのではなく」、「解きほぐすに由のない世間の圧力のため」であると述べている。また「わたしは訴える」や「孤独の広場」においては、サディスト、マゾヒストに対する世間のイメージに対して多く筆が割かれ、これらの偏見に対する憤りをあらわにしている。彼は自身のサディズムを恥じてはいない。匿名で執筆したのはあくまで社会の圧力のためである。

それどころか、後述するように、彼は「愛情と平和の心理としてのサディズムを信じ、実行し」ていた^⑧。「私はサディズムという言葉から、不合理的な残虐や犯罪的な観念を追い出した」と常にねがっている一人です」と述べ、現状のサディズムが残虐な犯罪者を含むことを踏まえた上で、彼らに呼びかけ、平和的な新しいサディズム概念を打ち立てようとしている様子がうかがえる。これは吾妻新のテキスト全編にわたる基本的な態度である。

彼はサディズムを人間の近代化の文脈で語り、それは彼の村上としての業績を補完するものであるといえる。以下、村上のサディズム論がいかなるもので、そこからいかに彼の女性解放論が読み直し可能かという点について、章を改めて論じたい。

三 村上信彦のサディズム論

(一) 近代化されたサディズム

まず確認しておきたいことは、村上のサディズム論は、彼の『明治女性史』と同時に構想されたものであるという点である。村上は『明治女性史』上巻において、本書の構想は昭和三年(一九五六)にほぼ固まっ

たと述べている。このことは吾妻の「明治時代の新聞覚え書」シリーズが明らかに『明治女性史』執筆のための余滴であることから裏づけられる。かつて村上が本書によって「女の全生活史」を提唱した際、井上耀子氏は『明治女性史』をして、一九六〇年代以降に登場した新しい視角の潮流と見た。氏は「マイホーム主義と生きがい論がマスコミをにぎわす時代に至って構想された女性史が、「解放」を主導理念とするのではなく、むしろ「正しい生き方」や「人間のエネルギー」に着目した「女の全生活」の記録であったのは、少しも不思議ではない」と述べている。『明治女性史』は刊行当時流行していた社会史や民衆史といった視角ともあいまって、このようにしばしば「解放史」へのアンチテーゼとして受け止められがちであったが、これは不十分な理解である。『明治女性史』は村上の経済的問題により刊行が遅れたが、彼は一九五〇年代、経済的貧困のさなか、むしろ「解放史」の隆盛に先行する形で自身の女性史を構想し、同時に特異なサディズム擁護論を完成させた。二〇年という長い期間に村上の思考が変化してはいないはずはなく、『明治女性史』は一九五〇年代当時の彼の思想を完璧に保証するものではもちろんない。しかし彼が一九四七年に発表した『女について』においてほぼ完成された女性論を示し、彼の後年の主張の多くがすでに出そろっていることを踏まえれば、『明治女性史』を村上のサディズム論と比較することはあながち不当なアプローチとは言えないだろう。

現代において、サディズムとは加虐的な性的嗜好を好む「異常な」心理、また攻撃的な人格を指す精神医学の用語としての定義に加え、「正常な」人々においても、性格の傾向など、より広範な文脈で用いられる概念となっている。村上がサディズムを論じた一九五〇年代においては、児童虐待から性犯罪、猟奇殺人、歴史上の刑罰、殺戮に至るまでの多様な残虐行為がすべてサディズムの名で呼ばれ、「残虐行為のごみ捨て

場」の観を呈しており、これらはすべて「異常者」としてひとまとめにされていた。

かつて筆者は、現在のサディズム概念の拡大・大衆化の端緒は、まさに『奇譚クラブ』誌上の村上⇨吾妻のサディズム論にあったと簡略に論じた。彼の議論は当時としては画期的であり、その後の日本の性文化にも大きな影響を与えているのであるが、この点に関する彼の貢献については本稿では触れず、彼の女性論、特に『明治女性史』との関連に絞って論ずることとしたい。以下、前稿を要約する形で、彼の提唱した近代化されたサディズムの概要を確認したい。

村上は『奇譚クラブ』において、サディズムの語源であるフランスのサド侯爵に代表されるような、「被害者」の同意無く、相手を肉体的に傷付け、殺傷するなどの「残酷さが生命」である加虐の実践は、古いサディズムであり、真のサディズムではないと主張した。真のサディズムとは、男女同権の対等関係を前提とした精神的な被虐・加虐関係であるとし、これを近代化されたサディズムと位置付けたのである。この新しいサディズムは、「寝室に限定され」、「肉体的苦痛より心理的苦悩」、「拷問ではなく折檻であり、惨酷ではなくて凌辱」を重視する。そして、「利他的衝動的でなく、日常生活に採り入れて永続させる」必要があるという。つまり村上は、「残虐行為のごみ捨て場」であったサディズムを性的なものに限定し、合意を前提とすることで、「サディズムという言葉から、不合理な残虐や犯罪的な観念を追い出し、対等な近代的夫婦による性の遊戯に落とし込もうとした。

夫婦間における性的な対等関係は、戦後、高橋鐵らによって「快樂の平等」という形でまず展開していた。これまで不可視であった妻の快樂が発見され、彼女たちに男と同等に快樂を感じさせなければいけないと考えられ始めたのが、戦後から一九五〇年代にかけてであった。

しかし、この快樂の平等主義は、あくまで男性が主体となり、「性愛技戯」によって女たちを「救う」という男性本位の価値観に支配されたものであった^④。これらは現実生活における男性の主導権を温存しつつ、寝室でのみ見せかけの「平等」を実現しようとしたものである。しかし村上がサディズム論を通じて主張した男女平等は、現実生活での対等関係によって、逆に寝室での不平等を正当化しようとするものと言え、当時社会に浸透しつつあった快樂の平等主義とは一線を画するものである。村上は、「感情教育」において、従順で古風な属性を持っていたヒロイン・由紀を、自律的な女性へと「教育・啓蒙」した後、初めてサディスティックな遊戯へと誘う。「啓蒙された」由紀は「感情教育(七)」(表I-20)で以下のように語る。

私は長年にわたつて夫から、平等の觀念を植え付けられてきました。いまではそれが私たちの幸福のいちばん大切な前提だつたということとを悟っています。(五三〜五四頁)

パラドキシカルに響くかもしれませんが、夫婦間の完全な、あるいは完全に近い平等の意識がなければ、女は安心してこの種の遊びに溶けこむことはできないのです(六四頁)

村上が構想し、また実践したのであろう対等な夫婦関係は、同時期に川島武宜が論じた「民主的家族」と共通の基盤を持つものである。川島は「民主的」近代的社会関係の特質」とは、「人が自らの行動について自主的に判断し決定することと、その必然的な他の一面としての人間人格の相互的な尊重」であるとした^⑤。村上はこのような自律的な男女間の愛情行為のバリエーションとして、近代化されたサディズムを構想した。

このような対等関係は、夫婦関係のみならず親子関係にも適用される。

川島は続けて人身売買について言及する。

儒教的倫理は、子を売つて醜業に従事させる親の「自由」をみとめる(中略)。ここでは親子や夫婦の関係は、一方的な支配と一方的な服従の関係、一方が権利のみを有し他方は義務のみを負う関係であり、両者が互いに「権利」をもち「義務」を負うという関係ではない^⑥。

『明治女性史』において、村上はまさに川島と同じ論理で、親による人身売買が儒教的倫理観によって正当化され、あまつさえ「孝」として称賛されさせた社会構造を激しく批判した。そして、双方が民主的で平等な関係を基礎として、相互に権利と義務を負うなら、さらに、相互に支配と服従の関係に合意するなら、サディズムも正当化されることになる。このように、村上のサディズム論と封建制批判は対になっているのである。

(二) サディズムの「馴致」

サディズムを非犯罪化し、遊戯へと転換させようとした村上であるが、しかしながら彼は、犯罪心理としてのサディズムと遊戯としてのサディズムを強固に連続的に捉えてもいた。サディズムを初めて定義したクラフト＝エビングや、村上がしばしば引用したハヴロック・エリスらと同様、この点に関しては彼は極めて平凡に、これを人間の「原始的本能」とみなした。サディズムは、「古代からあり、現代にもどこにでもある極めてありふれた抑圧衝動の変型」であり、「だから軍隊や警察や戦場のように、ある条件が与えられるとほとんどすべての人間に、程度の差こそあれ復活」するとする。つまり村上は、人間は全員潜在的にサディズムという本能を持っていると考え、マゾヒズムとは非対称にこれをとらえ

ていた。

かなしいことにこの種の衝動は、教養や節度をもった人間にも、高い思想や正義感の持主にも残存しているのです。暴力を好まず、弱者を虐げるものに義憤をかんじ、男女の平等を真剣に求めるものすら、有りえます。なぜならそれは性衝動だからです。

まさに村上自身を省みての発言である。村上は『音高く流れぬ』、『黒助の日記』において、彼自身の少年時代の同性愛傾向や、強い性欲に苦しめられたことに触れ、エリスの『性の心理』やクラフト＝エビングの『変態性欲心理』を熟読したと述べている。村上名義のこの小説で彼はサディズムには全く触れていないが、恐らく彼の悩みの中には、自身のサディズムの傾向に関するものが少なからず含まれていたはずである。抑えがたいこの衝動が、サディズムを本能とみる視角につながったのだろう。村上はさらに、ボーヴォワールを引きつつ、親子間のサディズム、会社や学校における上下関係、幼年時代の遊戯、闘争的なあらゆる面における競争、そして家父長制や夫権、嫁いびりなどもすべて明らかな「サディズムの変形」であるとす⁵³。

したがって彼は、「だから問題は、人がどんな欲望をもっているかではなく、社会的に行為として現れた場合である」として、サディズムが発露する社会的条件を重視する。村上は「私は訴える」（表I-31）において戦後の少年犯罪と売春風俗の激増について触れ、「今日の日本社会は、すべての人間を変質化する条件を備えている」としてこれらを非常に危険視する。変質化とは、サディズムが発露し、「異常」な反社会的行動に導かれてしまうことを指している。

村上は「サドは真のサディストではない」と述べたが、それはこのよ

うなサディズム理解に基づいている。サディズムはサド以前から普遍的に人間社会に存在する本能であり、サドはそれを発露させて著名になった人物に過ぎない。彼がサドに関して、「サドはのちにシャラントンの癡狂院で死んだ典型的な変質者だが、それを助長したのはながい投獄生活のためである。獄中の抑圧は空想のなかに爆発した」と述べている点は注目に値する。村上はサドでさえも、その加虐性を生来のものと解さず、社会的条件の影響を重視するのである。

村上のサディズム論は、なぜ彼がサディズムという概念にここまでこだわるのか、という点で奇妙であった。例えばサディズムを逆に残虐行為に限定し、自らの行為をサディズムから離脱させることもできたはずだからである。しかし彼がこれを最後まで手放さなかったのは、サディズムが普遍的に存在する本能であり、これらは家父長制の維持に貢献しており、したがってサディズムを「馴致する」ことこそが、当時の社会にとつて取り組むべき課題だと考えていたからに他ならない。村上が近代化されたサディズムを「愛と平和の心理」と評した理由もこの点にある。村上は以下のように述べている。

猛獣は弾で撃ち殺せるが、すべての人間に潜在する本能を殺す武器はないのだ。だとすれば、これを暗い抑圧の世界に追いやって、社会的に危険な爆発薬に転化させるよりも、個個人の性生活のなかで無害に発散または昇華させなければならない。⁵⁴

サディズムは馴らしがたい不死身の猛獣である。村上にとつて、多くの犯罪・社会問題の淵源はサディズムにあった。この「野蛮な原始的本能」を抑圧するだけでは、社会に危険な「爆発薬」を内包することになる。そうではなくて、サディズムを個人の性生活に限定し飼いならすこと、

サディズムを「馴致する」ことこそが、現代の様々な犯罪、悲劇を抑止することにつながるのである。

文明は、過去には危険であった原始的本能をつぎつぎに馴致し変形し、てなすけてきた。(中略) サディズムの馴致こそは僕らに残された現代のいちばん大きい課題である。⁷⁾

村上のいう「文明」とは、とりもなおさず人間の理性と意思を指している。この近代的な二つの武器によって、サディズムを近代化せしめること、これを「現代のいちばん大きい課題」とするのである。サディズムの近代化は村上らの個人的生活の問題ではなく、全人類の問題なのである。だから彼はあえてサディストを名乗ったのである。

サディズムの近代化の障害として村上が第一に取り上げるのが、理性と意思の力を弱めるヒロポン中毒である。これは国家が蔓延させたものであり、ここに少年犯罪増加の原因を見る。そして第二に、性衝動を刺激し、さらに女性をモノとして扱う売春風俗が人々に与える影響を重大視する。ここに至って、彼のサディズム論ははつきりと女性解放論に接続される。彼が女性論において、公娼制度の廃止を重視した理由はここにあるし、様々な家父長制下の女性の抑圧はサディズムの変形として彼に認識されていた。

四 村上信彦のサディズム論と女性論

(一) 藤目ゆき氏による村上批判

『性の歴史学』を著した藤目ゆき氏は、本書を「村上女性史に対する反

論の書」と位置付け、村上女性史は「欧米Ⅱ文明国、日本Ⅱ後進国、封建制Ⅱ女性の抑圧・近代化Ⅱ女性の解放とする構想、西欧近代と日本近代の国家発展の方向を肯定するイデオロギーが基調をなし、著作の全編を貫いて」といると批判した。⁸⁾ 藤目氏によれば、「村上の研究は、明治以来の日本の娼娼運動家たちのものの見方と価値観を踏襲したものであり」、その価値観とは、「売淫」とは「最後のものを売るどん底」であり、「二度と通常社会に戻れない」ものであり、「娼婦とは自分の意思で就く職業であるはずがなく、救済されるべき奴隷である」というものである。そのベースとなったのは「貞操を「最後のもの」と発想する村上の倫理観と、娼妓への「醜業婦」視である」という。

たしかに村上の主張には感情的な面があり、そのため記述が不正確な点が見受けられる。外崎光広氏に指摘された植木枝盛に対する記述などがそれにあたる。⁹⁾ そして、現在の我々から見ればイデオロギー的にふさわしくない表現がある。「貞操」や「醜業」といった用語がそれである。しかしながら村上には彼独特の言葉の用法があり、また時代的制約を踏まえれば、これらの語を現代の定義で理解するのではなく、その文脈からその意味を正確に理解する必要があるだろう。以下、藤目氏の批判は誤解によるものであることを、吾妻のテキストを適宜参照しながら述べてゆきたい。

村上が欧米Ⅱ文明国のような単純な思考の持主でなかったことは、既に知られた彼の著作を丁寧に読めばわかることであるので簡略に述べるが、吾妻のテキストを読めばこのことはさらに明瞭になる。第一に彼は、表I-8において、沼正三によるアメリカを男女平等の観点から先進国と見る視角に批判を加えているし、村上はアメリカやヨーロッパのサディズムを機械的で粗野な古いサディズムとし、古川裕子「囚衣」(『奇譚クラブ』一九五二年二月号)に見えるサディズムを新しい精錬されたサ

ディズムとして称賛している。その一方で、村上は欧米にも新しいサディズムの萌芽を求め、全世界的な動きとしてサディズムの近代化を唱える。文明国対後進国という単純な図式は見られない。

次に、村上の娼妓及び公娼制度に対する価値観であるが、藤目氏は、村上には女性の間の階級性への視点が抜け落ちているとして、実際に売春に従事する女性たちと、娼娼運動にかかわった中・上層階級の女性たちの間に横たわる断絶に着目する視点を打ち出した。氏は、後者の女性たちには「自分や姉妹たちが売春におこまれてゆく階級・階層の苦悩を容易に理解できず、何かしら遅れた道徳観念や無知のゆえに売春が行われているとみなし」、このような性倫理の二重基準が暴力的な国家統制を擁護する基盤となっていると指摘する^⑧。

筆者は当時の娼娼運動の一部に娼妓への「醜業婦」視があったことは否定しない。そして村上がこれらの女性たちの階級性について論じていないことも否定しない。しかし村上がこの点に着目しなかったのは、藤目氏の指摘とは全く逆の理由であったと考える。筆者の見る限り、彼はむしろ、藤目氏の着目するいわゆる性倫理の二重規範に非常に注意を払ってきた人物である。

(二) 村上信彦における性倫理の二重規範論批判

第一に彼は『明治女性史 下巻』において以下のように述べている。

女には母性型と娼娼型の二つがあつて、娼娼になるものは後者だといふ説があるが、どれほど現実を調査した上の立論であろうか。(中略)母性も娼娼も紙一重の境遇の差であつた。世のすべての男が娼男であればこそ生み出された娼娼であつた。(三〇頁)

本記述には説明が必要だろう。「母性型と娼娼型」といった対比は戦後期の雑誌等にしばしばみられたトピックでもあるが、明治期の娼娼運動における重要な論点でもある^⑨。藤目氏は、中・上層階級の女性らは売春におこまれてゆく階級・階層の苦悩を理解できないと考え、娼娼運動に階級という視点を持ち込んだ。しかし村上は逆に、これら「中・上層階級」の女性たちによる娼妓への醜業視は、彼女たちが無意識的に娼妓への転落を恐怖しているが故であると考へた。村上の一九五七年の著作『流行』(表II-58)には、花柳界のファッションが一般の女性に流行する理由についての説明があるのでみておきたい。

村上によれば、封建社会では、「女そのものが一箇の商品として觀念されて」おり、「男は女を買うこともできるし、売ることもできる」、そのため、「妻の座を確保するためには、つねに夫の愛情をひきつけるように努力しなければなりません」。「彼女たちは夫を誘惑する賤しい女をケイベツしながら」「意識的にも無意識的にもその化粧や髪かたちや服装をまねせずにはいられなかった」のだという^⑩。

つまり、女性を商品として見、人身売買を法的に認める公娼制が存在する日本の封建社会では、中・上層家庭の妻でさえ、つねに娼妓へ転落する可能性があったとみているのである。実際に村上は『明治女性史』においても、吾妻名義の「明治時代の新聞覚書」シリーズにおいても、妻を売買した夫の事例を複数紹介している。村上が公娼制度を女性史研究における最も重要なトピックとして位置付けたのは、この女性の商品化、モノ化こそを、女性への歴史的抑圧の根本的原因の一つと見ているからなのである。本稿では個別に取り上げることはしないが、この点は吾妻名義のテキストにおいても明瞭に現れている。

村上によれば、封建社会において、妻たちは一方で良き妻として貞女を演じ、一方で娼娼の真似事をしながら夫に従属しなければならなかつ

た。それを体現しているのが、村上に言わせればキモノでありスカートであり、男のための女の服装である。彼の女性論と服装論が密接に関連していることがここから読み取れる。

彼の主張は「感情教育」において、ヒロインの由紀に語らせた以下の主張からより明瞭になる。

「昼は処女のごとく、夜は娼婦のごとく」という言葉がありますが、(中略)封建的な時代にもつともマッチした理想型を言いあらわしたもので(中略)、女の心理は処女でもなければ娼婦でもなく、ひとつであったはずです。(中略)いわゆるアブノーマルといわれる性生活とノーマルな日常生活とは、すこしも矛盾せずに成り立つということとです。(五五～五六頁)

女は封建社会によって娼婦と処女に引き裂かれている。女たちが娼婦と処女に別れるのではない。一人の女が、常に二つに引き裂かれていることを批判しているのであり、上記の『明治女性史』の記述もこの意味で捉えうる。村上には直接的な被害をこうむる娼妓だけではなく、一見安全な地位にいるかみえる中・上層階級の女性もまたある種の被害者であると認識していた。したがって、彼の女性論に階級性への視点がないのは当然なのである。しかし、その欠如は娼婦への差別感情のためではなく、女性に対する抑圧構造をより重く受けとめていたがためなのである。

このことを傍証するものとして、村上のサディズム論から彼の「貞操」観、「醜業婦」観について探りたい。既述の通り、彼の提唱した近代化したサディズムは、「肉体的苦痛より心理的苦悩」を重視し、「拷問ではなく折檻であり、惨酷ではなくて凌辱」をその本分としていた。村上はその理由について、古いサディズムの代表者と彼がみなしたサドのサディ

ズム批判を通じて以下のように述べる。

サードは稀代のサディストといえますが、だから彼のサディズムが比類ないとか完全だとか云うのは誤りなのです。(中略)一言で要約すれば、彼流のやりかたは、自己をも他人をも幸福にしないということとです。⁶⁵⁾

サド流のやり方とは、単純な肉体的苦痛を相手に与えるものである。このやり方は、「ぐでんぐでんに酒を飲むのと同じ心理、興奮の中の自己忘却」であり、「相手の幸福などは計算に入れないし、自己の快感も飢餓が満たされると同時に消滅します」。これらは次第に酒量が増えるのと同様に次第にエスカレートし、甚だしきは相手の殺傷に至るので、長期間継続することができず、愛する者との性生活には取り込めない。

したがって村上が重視するのは、苦痛そのものではなく「苦痛よりも苦痛にみえること、屈辱感を深めるような点」であり、「サードはただ苦しめればよかつたのでしようが、私たちは縛ったり吊るすこと自体に苦痛を与えぬよう細心の注意を払います」。村上には着衣のまま妻を縛ることを好んだが、その理由の一つは「直接肉体を傷付けない」からであった。

それでは逆に心理的苦悩、凌辱とは具体的にどのような行為なのだろうか。「最も洗練されたサディズム」と称して村上が実践するのは、汚物による猿ぐつわである。彼は彼自身の禪を猿ぐつわに用い、その臭気によって妻を「凌辱」することを好んだ。彼はその「効用」を以下のように語っている。

猿轡がどうでもよい布切れでなくあらかじめ念入りに用意された夫の禪で行われ、そのもつとも汚れた部分を口に当てて、汚辱感を百

パーセントみだしていること。この場合には鏡にうつされたその姿をみることに、いやでも汚臭を嗅ぐこととで、視覚と嗅覚が大きな役割をしています。元来縄で縛ることと猿轡とは肉体的苦痛よりも、自由を奪われて何をされても抵抗できないという状態をすることで意識させるためのもので、あたらしいサディズムのいちばん魅力のある方法なのですが(後略)⁶⁶

「凌辱」において重要なのは、視覚や嗅覚によって汚辱状態・拘束状態を鋭く意識させることであるという。彼によればこれは完全に精神的なものであり、行為の終了後に一切の痕跡を残さないため、日常の対等関係にすぐさま復帰できる点が優れているという。

このような猿ぐつわの利用と肉体的苦痛のどちらがましかということはおおいに見解が分かれるだろうし、村上が自身の個人的な臭いへのフェティシズムを過大に投影している側面があることは否定できないが、それはともかく、彼がこのように肉体的苦痛と精神的苦痛をはっきりと切り分けていることに着目したい。彼は精神的苦痛を肉体的苦痛より軽微な苦痛とみなしているようである。彼にとっては物質的な暴力、特に同意なくふるわれる暴力こそが忌むべき対象なのである。

この点をふまえて村上の公娼制の理解を検討したい。村上は公娼制度を論ずる際、山室軍平『社会廓清論』中の次の文章を好み、しばしば引用している。

若し茲に人あり、年若き一婦人を捕へ、之を一室に監禁し、之に猿轡をはめ、其両手を縛り、人々をして寄つてたかつて、之を辱めさせて居つたとしたら、何うであらう。社会は必ず其暴行を憤るであらう。(中略)然るに今公娼とは如何なるものかといふに、これは即

ち旧時代の迷信的道德を以て人の娘に猿轡を嵌め、前借金といふ荒縄を以て其両手を縛り、これを遊郭と名くる別室に監禁し置き貸座敷営業者と名くる強姦幫助者の手を仮りて遊客と名くる色情狂者等が入りかはり立ちかはり、之を辱しめ、然もそれが一日や二日のことではない(後略)⁶⁷

村上がこの表現を好んだことは二つの点で興味深い。第一に、彼が『奇譚クラブ』誌上で肯定した拘束や緊縛、そして猿ぐつわが、信頼関係のない者に行われた場合許しがたい暴力行為となると彼が認識していた点、第二に、村上の公娼の待遇の認識は、このようなものであり、明治時代において娼妓が自発的に公娼になることがあるとは全く考えていなかったという点である。村上は「自由意志とみえるものも、その実は絶望や自棄や怨念に燃えている」、「娼婦ひとりひとりの人生に立ち入ってみれば、本人の自由意志でこの道を選んだものは絶無に等しい⁶⁸」とも述べている。これは実際に村上が収集した事例に基づいた見解であり、明治時代の公娼に限ってみれば間違いとはいえない。セックスワーカーを一律に被害者と見るような現代の一部の売買春論と同列に扱うべきではない。

さて、したがって村上は、公娼の受ける行為をすべて拒否権が無いがゆえの肉体的暴力であると捉えていた。第一の点からさらに注目したいのは、村上が『明治女性史 下巻』四〇頁における以下の記述である。

いつの時代にも娼婦はあらゆる男の要求を体験させられている。戦後まもなく会員組織で頒布された新小岩の娼婦たちの座談会速記録では五人の女が体験を語っているが、そのなかにはおどろくほど多種多様な変態性欲の例が赤裸に報告されている。

新小岩の娼婦たちの座談会速記録とは、日本生活心理学会研究所による「新小岩娼街に於て売笑体験を訊く」という速記録であるが、村上は「私は訴える」においてこれもこれを引用し以下のように述べている。

「新小岩娼街に於て売笑体験を訊く」に赤裸々な告白があり、娼婦の大半がこの種の「変態」を経験していることがわかる。つまり、無数の人間がこの種の欲望をもっているのです、ただそれは抑圧されるか、売笑婦のように金で自由になる女を相手に、一時的にみたくしているかにすぎない。そして、売娼を政府がみとめるかぎり、それに伴うこの種の行為をやはり罰することはできないのである。(四四頁)

村上は娼妓らの受ける暴力として、「多種多様の変態性欲」、特に古いサイダイズムの被害を想定していたとみて間違いない。

このほか、乱暴な性病検査による肉体的苦痛、睡眠を制限される苦痛など、彼が問題視する苦痛は多くが即物的で性別に関係のないものである。「貞操」を失う苦痛についても言及するものの、これらは封建時代の誤った価値観に女性が支配されているからであるとして、彼自身が「貞操」を重んじた形跡はみられない。村上が『奇譚クラブ』において、浣腸マニアの女性や生粋のマゾヒスト女性にしばしば讃辞を送っていることにかんがみても、強制された売春ということで彼が女性を蔑視したとは到底考えられない。彼は拒否権も選択肢も無い娼妓たちの具体的な肉体的苦痛を「どん底」の状態とし、暴力が常態である公娼制をその非人道的性から「醜業」としていたのであり、これを糾弾こそすれ差別などしていないと言えよう。

彼はまた「すべての人間は一夫多妻、一妻多夫の本能をもっている」とも述べている。女性の性欲を男性の性欲と同じ程度に評価している様

がうかがえよう。とするならば、かかる立場の村上が女性のみに特別重視されたイデオロギッシュな「貞操」観を保持していたはずがない。村上はいかなる立場の女性に対しても、彼女たちを娼婦や貞女として評価したりはしない。男性と同じただの人間と捉えようとし、それを提唱したのである。

おわりに

以上四章にわたって、村上信彦と吾妻新の同定と、彼のサイダイズムの特徴と村上の女性論とのかかわりについて論じてきた。先行研究における村上の女性論の理解は誤解に基づく点も多く、彼の吾妻新としてのテクストはこれらの誤解を解き、新たに村上の思想を理解する助けになることが示せたと考える。

村上が、引き裂かれた女を統合し、ただ一つの人間として捉えようとしたことは、一九七〇年代に始まるウーマン・リブの主張と多くの共通点をもつものと言える。村上はリブに先んずること二〇年、一九五〇年代に既にこれを『奇譚クラブ』において示していた。

既に述べたとおり、村上の叙述は独特な点があり、誤解を生みやすい。これは村上が完全なる在野の研究者であったことも影響していると考えられるが、この欠点を以て村上の思想を過去のものとして忘れ去ってしまうことは率直に「もったいない」というのが筆者の考えである。村上の先見性、男女の民主的平等と矛盾しないサイダイズムという視点、そして彼の性倫理の二重規範に対する考え方など、彼の思想は現代においても考察に値する価値がある。また、本稿では論じる紙幅がなかったが、村上が公娼制度を海外には存在せず日本独自のものであると主張したとされる点に関しても、これらは明らかな誤解に基づいている点があり、再考

の余地がある。

村上は『奇譚クラブ』においても、「服装の利用」（表I-23）などで、スカートやコルセット、ハイヒールなどの女性の服装が持つ抑圧性について指摘し、これをサディズムと関連させて論じている。本稿において、彼の女性論にも服装論との関連が見出されたと思う。彼の著作は相互に密接に関連しているが、従来これらの関係性が十分に考慮されたことは少ないようである。しかし彼の女性論は、本来彼のライフワークであった服装研究から派生したものであり、服装論こそが彼の女性論に先行していたことは忘れてはならない。また本稿では村上の小説を多く引用したが、彼の小説は多く自身の体験をもとにして書かれ、彼の思想が多く盛り込まれている。特に『黒助の日記』は彼の日記を基に記された「ドキュメント小説」であり、十分に資料的価値を持つ。「感情教育」や「夜光島」は、彼のサディズム論の根幹にかかわる作品であり、彼の思想を補完する重要な資料足りうる。今後は、彼の女性論だけでなく、彼の服装論や・サディズム論、小説も含めた複合的な視点からの考察により、思想家としての村上信彦を再評価してゆく必要がある。

注

- ① 村上が起こした論争の経緯は、古庄ゆき子編『資料 女性史論争』（ドメス出版、一九八七年）に詳しい。
- ② 加藤桂子・田村瑞穂・土井雅也・宮西郁美「資料翻刻 村上信彦・高群逸枝往復書簡」（『日本近代文学館年誌』一〇、二〇一四年）。
- ③ 西川祐子『森の家の巫女 高群逸枝』（新潮社、一九八二年）。
- ④ これまでに知られる別名の著作として、「和見正夫」名義の翻訳がある。（『悲惨の涯』興風館、一九四〇年、シエロツエウスキ著。村上信彦「私とエスペラントの出会い」『La Movado』（一九六八年七月号）参照。
- ⑤ 沼との間に起こった論争については別稿にて論じた。あわせて参照した

- だければ幸いである。（拙稿「吾妻新と沼正三によるズボン・スラックス論争―一九五〇年代『奇譚クラブ』にみえる日本的サディズムの萌芽―」『年報カルチュラル・スタディーズ』四、二〇一六年七月刊行予定）。
- ⑥ 本表の作成にあたっては、立命館大学衣笠図書館・藤本匡氏に多大なご協力を賜った。記して謝意を表したい。
 - ⑦ 由紀は村上の小説『霧』（表II-12）のヒロインの名でもある。
 - ⑧ 表I-20、「感情教育（七）」六〇頁。
 - ⑨ 村上信彦「私のなかの高群逸枝1」（『高群逸枝雑誌』一七、一九七二年）なお、こぶし書房から再販された『女について―反女性論的考察―』（一九九七年、初出は興風館版で一九四七年）巻末には村上の簡略な年譜がある。
 - ⑩ 表I-30、「感情教育（十一）」二〇九頁。
 - ⑪ 表I-12、「感情教育」二〇九頁。
 - ⑫ 『霧のなかの歌』（三二書房、一九六一年）。
 - ⑬ 次女・三女の名は前掲注⑨、『女について』巻末の年譜を参照した。
 - ⑭ 村上信彦『服装の歴史―キモノが生れるまで』（理論社、一九五五年）四頁。
 - ⑮ その他、表I-8、「女のズボンについて」一三三頁にも同エピソードがみえる。
 - ⑯ 表I-12、「感情教育」一八四頁。
 - ⑰ 村上の成育歴については、『音高く流れぬ』、『黒助の日記』、『私のなかの高群逸枝』等を参照した。
 - ⑱ 前掲注⑨、村上信彦「私のなかの高群逸枝1」一九頁。
 - ⑲ 村上信彦「石川三四郎との思い出」（『柳』二四一九、一九七八年）六頁。
 - ⑳ 村上信彦『黒助の日記（一）偶像崩壊』（偕成社、一九七七年）八四頁。表I-43、「さいたふう」一二四頁。
 - ㉑ 「前略」自分でシナリオを書くことと決心したからだ。（中略）ちようどこの春から映画製作にもタッチすることになるので」（『さいたふう』一二六頁）。
 - ㉒ 前掲注②、加藤桂子・田村瑞穂・土井雅也・宮西郁美「資料翻刻 村上信彦・高群逸枝往復書簡」、注二一（一八〇頁）。

- ②④ 村上信彦「私のなかの高群逸枝2」(『高群逸枝雑誌』一八、一九七三年)、二二頁。
- ②⑤ 村上信彦「私のなかの高群逸枝3」(『高群逸枝雑誌』一九、一九七三年)、二二頁。
- ②⑥ 前掲注②⑤、村上信彦「私のなかの高群逸枝3」二二頁。
- ②⑦ 表I-27、「感情教育(二〇)」一八五頁。表II-86、「霧のなかの歌第一部」九一〜九二頁等。
- ②⑧ 興風館については以下を参照した。『日本教育会館50年沿革史—帝国教育会から日教組へ—』(日本教育会館、一九七九年)。
- ②⑨ 表I-24、「感情教育(九)」二一八〜二一九頁。
- ③⑩ 江種満子「高群逸枝・村上信彦の戦後一六年間の往復書簡をめぐって」(『日本近代文学館年誌』第一〇号、二〇一四年)。
- ③⑪ 前掲注②④、「私のなかの高群逸枝2」一八〜一九頁。
- ③⑫ 巨額の負債を負って生活苦に陥ったことは、「感情教育」のエピソードにもなっている。
- ③⑬ 前掲注②⑤、村上信彦「私のなかの高群逸枝3」二二頁。
- ③⑭ 濡木痴夢男『『奇譚クラブ』の絵師たち』(河出書房新社、二〇〇四年)六三頁。飯田豊一『『奇譚クラブ』から『裏窓』へ』(論創社、二〇一三年)三六頁。濡木は飯田の筆名。
- ③⑮ 表I-43、「きいたふう」二二〇頁。
- ③⑯ 村上は『奇譚クラブ』誌上で古川裕子という人物と深い交流を持ち、誌上に「愛の告白」をされるまでになった。告白をきっかけに古川・村上ともに『奇譚クラブ』への寄稿を停止し、その五年後、吾妻による古川への呼びかけがあった後、両者とも完全に『奇譚クラブ』から姿を消した。表I-46、47に五年間の空白が存在するのはこのためである。
- ③⑰ 表I-30、「感情教育(十一)」二二七頁。
- ③⑱ 表I-43、「きいたふう」二二〇頁。
- ③⑲ 表II-36、「テート・ベージュ」。
- ④⑩ 日本近代文学館蔵、昭和二十二年(一九四七)二月二日付書簡(資料番号・78527)。
- ④⑪ 表I-12、「感情教育」一七六頁。
- ④⑫ 村上信彦『明治女性史 上巻』(理論社、一九六九年)五頁。
- ④⑬ 井上輝子「新たな女性史の構築をめざして」(前掲注①、古庄ゆき子編『資料 女性史論争』一八五頁)。
- ④⑭ 『明治女性史』は上巻「まえがき」、そして『思想』一九七〇年三月号に発表した論考「女性史研究の課題と展望」に記されている問題提起と、実際に用いられている手法に矛盾があるという指摘がある(大木基子「史学としての女性史の確立を」、前掲注①、古庄ゆき子編『資料 女性史論争』、一四一頁)。矛盾とうつる分かりにくさは、『明治女性史』の構想が非常に長きにわたる点と無関係ではないと考える。村上を発端に起きたいわゆる女性史論争では、村上の他の著作が参照されることはほとんどなかったため、村上の真意は伝わったとはいえない。例えば一九四七年に書かれた『女について』、そして彼がライフワークと称した一連の服装史研究等と引き比べながら理解する必要がある、別稿にて論ずるつもりである。
- ④⑮ 篠原三郎氏もまた、こぶし書房版『女について』(前掲注⑨)の解説において、村上の先見性について指摘している。(二四四〜二五五頁)。
- ④⑯ 表I-31、「私は訴える」五一頁。
- ④⑰ 拙稿「病から遊戯へ—吾妻の新しいサディズム論—」(井上章一・三橋順子編『性欲の研究 東京のエロ地理編』平凡社、二〇一五年)。
- ④⑱ 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』(勁草書房、一九九九年)、鈴木敏文『性の伝道者 高橋鐵』(河出書房新社、一九九三年)。
- ④⑲ 田中亜以子「「感じさせられる女」と「感じさせる男」」(小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『変容する親密圏/公共圏8 セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会、二〇一四年)。
- ⑤⑩ 川島武宜『日本社会の家族的構成』(日本評論社、一九五〇年)八頁。
- ⑤⑪ 前掲注⑤⑩、川島武宜『日本社会の家族的構成』一〇頁。
- ⑤⑫ 表I-47、「古川裕子への手紙」七九頁。
- ⑤⑬ 表I-31、「私は訴える」四六頁。
- ⑤⑭ 表I-31、「私は訴える」四四頁。
- ⑤⑮ 表I-31、「私は訴える」四八頁。
- ⑤⑯ 表I-31、「私は訴える」五一頁。

- ⑤7 表I-31、「私は訴える」五一頁。
- ⑤8 藤目ゆき『性の歴史学』（不二出版、一九九九年）二五頁。
- ⑤9 村上是『明治女性史』における植木枝盛の評価をめぐる外崎光広氏と論争を起こした。詳細は下記を参照。外崎光広「村上信彦著『明治女性史』（『歴史評論』二七六、一九七二年）、同「植木枝盛の婦人論をめぐる村上信彦・富田信男・熊谷開作氏の所論批判」（『高知短期大学社会科学論集』二五、一九七二年）、同「植木枝盛の婦人論について 村上信彦氏の反論に答える」（『社会科学論集』二九、一九七五年）、村上信彦『明治女性史』批判への小論―主として植木枝盛論―（『歴史評論』二九四、一九七四年）。
- ⑥0 藤目ゆき「女性史研究と性暴力パラダイム」（『フェミニズム的転回』白澤社、二〇〇一年）。なお、性倫理の二重規範による女性たちの断絶、という藤目氏の視角については、既に林葉子氏による批判があり、それは村上の主張とも通ずる点がある。林葉子『『廃娼運動家』論・再考』（『大阪大学日本学報』二四、二〇〇五年）、同「廃娼論と産児制限論の融合」（『女性学』一三、二〇〇五年、注12等）。
- ⑥1 例えば、堀秀彦「あなたは娼婦型か・母性型か」『家庭の手帳』（第五・六合併号、一九五〇年）など。
- ⑥2 鈴木裕子「解説」（『日本女性運動資料集成 第八巻』不二出版、一九九七年）。
- ⑥3 表II-58、『流行』四四頁。
- ⑥4 ただし、彼は表I-43、「きいたふう」において、「ブルジョアの女」に対する嫌悪を吐露しており、彼の小説群には階級が重要な主題となっているものもある。本稿で指摘した村上の階級性への視角の欠如は、あくまで

廃娼論についてのみである点をお断りしておく。

- ⑥5 表I-1、「サディズムの精髓」二〇頁。
- ⑥6 表I-1、「サディズムの精髓」二二頁。
- ⑥7 山室軍平『社会廓清論』（警醒社書店、一九一四年）一三七―一三八頁。
- ⑥8 村上信彦『明治女性史 下巻』（理論社、一九七二年）三〇頁。
- ⑥9 表I-1、「サディズムの精髓」、表I-34、「裏返しのア感覚」、表I-41「孤独の広場」など。
- ⑦0 表I-31、「私は訴える」四四頁。
- ⑦1 上野千鶴子氏もまた、村上はその後のフェミニズムと共通した歴史観を持っていたと述べている。上野千鶴子『差異の政治学』岩波書店、二〇〇二年）。上野氏は筆者の知る限り、これまで最も高く村上を評価してきた研究者である。
- ⑦2 彼の女性論と服装論にかかわりについては、別稿（前掲注⑤、拙稿「吾妻新と沼正三によるズボン・スラックス論争」）にて中心的に論じた。
- ⑦3 村上は『女について』序文において自身の女性史研究を、「もうやりだしてから十五年ほどになり今では完全なlife-workになってしまった衣服研究の副産物」と記している。

〔付記〕

本稿執筆にあたっては、立命館大学先端総合学術研究科教授である小泉義之先生、松原洋子先生に貴重な御指摘を賜った。記して謝意を表したい。

（本学衣笠総合研究機構専門研究員）